

早稲田大学総合人文科学研究センター研究部門「イメージ文化史」主催

2019 年度 ワークショップ

「マンガの体験、メディアの体験」第3回 マンガと幻灯・アニメーション

日時 2019 年 4 月 20 日（土） 13：00～17：30

場所 早稲田大学戸山キャンパス 36 号館 6 階 682 教室

＜第Ⅰ部＞ 13:00～

鷺谷花（大阪国際児童文学振興財団特別専門員）

1940 年代「幻灯画」にみる「漫画家の職域」としての
フィルム／スクリーン

◆幻灯上映あり（協力：早稲田大学演劇博物館）

土居伸彰（ニューディアー代表／新千歳空港国際アニメーション映画祭フェスティバル・ディレクター）

そこになにかがあることを示す描線

——マンガとアニメーションのオブジェクト性

＜第Ⅱ部＞ 15:45～

細馬宏通（早稲田大学教授）

マンガのコマ連鎖はいかに映像化されうるか

お問合せ先：総合人文科学研究センター研究部門「イメージ文化史」

imagebunkashi@list.waseda.jp

さまざまな視覚メディアとの対比のなかで、マンガを読む／見るという体験の意味を考える連続ワークショップの第3回は、視覚文化研究をリードする3人の豪華な顔合わせになりました。

◆驚谷花：

1940年代「幻灯画」にみる「漫画家の職域」としてのフィルム／スクリーン

まずは映画論、日本映画史の領域で数多くの清新な論考を発表するとともに、幻灯研究の第一人者でもある驚谷さんに、マンガを幻灯画にするとき何が起きるのか、そこからマンガというメディアについて何を引き出すことができるのかを語っていただきます。今回は発表とともに、早稲田大学演劇博物館所蔵の貴重な幻灯フィルムを用い、長谷川町子作画による『サザエさん』等の映写も行われます(約25分の予定)。ぜひお見逃しのないように！

◆土居伸彰：

そこになにかがあることを示す描線——マンガとアニメーションのオブジェクト性

次に『個人的なハーモニー：ノルシュテインと現代アニメーション』（フィルムアート社、2016年）や『21世紀のアニメーションがわかる本』（同、2017年）でアニメーション研究に新しい領域を拓くとともに、世界中の多様なアニメーションを日本に紹介するディレクターとして大活躍中の土居さんに登壇していただきます。マンガとアニメにまたがって活躍する作家たち（久野遙子、ひらのりょう、近藤聡乃、大島智子ら）の仕事を取り上げながら、アニメーションのキャラクターが記号以上の身体として現れるとはいかなることかを論じてくれるでしょう。

◆細馬宏通：

マンガのコマ連鎖はいかに映像化されるか

最後は驚異的な視野の広さで視覚メディア研究の地平を拡大し続ける細馬さんのご発表です。細馬さんといえば、『二つの「この世界の片隅に」——マンガ、アニメーションの声と動作』（青土社、2017年）での二つのメディアを横断する見事な分析も記憶に新しいところ。『この世界の片隅に』や『ポプテピピック』などを取り上げながら、マンガをアニメーションに移し替えるとはどういう作業なのか、鮮やかに語ってくれるに違いありません。

静止イメージであるにもかかわらず動いているかのように見える（とされる）マンガのイメージを、スクリーンに投影するとき何が起こるのか、あるいはそれを「本当に」動かしてしまうとき起きているのは何なのか。多彩な顔ぶれで視覚文化論の核心に迫ります。（企画者：鈴木雅雄＋中田健太郎）